慈光

第六卷　第五號

昭和二十四年七月十三日第三種郵便物認可
昭和二十九年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第六二号）

目次

歎異のこころ……花田正夫……（1）
法蔵の四十八願……福島政雄……（4）
病床遺稿……白杵祖山……（8）
牝豺と鶴……チャータカ物語……（12）

歎異のこころ

花田正夫

歎異抄のできた年代は、恐らくは親鸞聖人御入滅後三十餘年、御孫如信上人もすでにお亡くなりになられた後でありませう。著者唯圓大徳も「露命わづかに枯草の身にかかりて」と自ら誌して居られますやうに、七十を過ぎ、或は八十に達してゐられた頃であらうと推定されます。

嘗ては関東と京都とを何度か往復した唯圓大徳も、今は年老いたまうて常州の草庵にあつて有縁の同朋と共に法味談合の生活を続けてゐられた頃、大徳の耳に、先師口伝の真信ならぬ、種々の異義がしきりに聞えて来るのでした。然しさうした芽生えはすでに祖師聖人御在世の頃からあつたことで聖人は御消息や末灯抄にねんごろにそこを導かれてゐるのが伺はれますが、そのことが段々と大きくなり、右に偏し、左に傾いて、或は放縱主義、或は律法主義となり、或は学問沙汰、或は善悪沙汰になつて互に争ひ合ふといふやうになつたのであります。

斯うした異義の数々を聞くにつけ、見るにつけ、老大徳唯圓房の悲しみ、歎く心は、くりごととなり、涙となつて深まり、遂に默つてゐることが出來なくなつて

「ひそかに愚案をめぐらして、ほぼ古今をかんがふるに先師口伝の真信にことなることを歎き、後学相続の疑惑有ることを思ふ。幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ることなかれ云々」

と本抄を書き起され

「かなしきかなや。さいはひに念佛しながら、直に報土にむまれずして、辺地にやどをとらんこと、一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なく〳〵筆をそめてこれをしるす。なづけて歎異抄といふべし。外見あるべからず」

と結ばれてありまして、老大徳の悲心が惻々と脉うち、切々と身に迫るものがあります。

異義者のすくひ

異義のもとは、自分中心な見方、聞き方にあります。他力真実の教をうけながらも、自分勝手な見解をもととして聞くところから、やがてそこに偏執して異義が現れるのであります。何事によらず自己中心な聞き方では独りよがりにおち身勝手なものになります。昔からよく言はれますことですが、手を叩くと池の鯉は水面に浮び、雀は飛び立ち女中さんはお茶を運んで来る。そのやうに銘々の智慧で聞くと千差萬別に乱れて、手を叩いた者の真意は見失はれて自分はかう聞いた、いやああであつたと争ふことになり、当事者は夫々自分の聞き方は正しいと思ひこんで、夢にも自分が間違つてゐるなんどとは思へないのであります。

かつて徳川時代の末期に、西本願寺派の教団で信心上の大擾乱がおこり、十年間も続いて、終りには幕府の裁きに移つたことがあります。その時の法主の裁断の書に

「古語にも、その愚を知るものは大愚に非ず、その惑を知るものは大惑にあらざるなりといへり。されば自らまどひとしりて惑ふ者はあらず、惑をまどひと知らざる故なり。かかる人は明者の指南にあらずんば、誰かよくその惑を解かんや」と懇ろに教へ諭されて居ります。

互にわれよし、われ正しだけで終つたならば、はてしない争論が繰り返されるばかりであり、我執を募り、あやまちを重ねるのみで浮ぶ瀬はありません。そこを救ひ出して下さるのは、唯明者の指南だけであります。

「異ることを歎く」即ち「異義者が可哀相である」との唯圓大徳のやむにやまれぬ涙こそ実に明者の指南であり、大悲真実のあらはれであります。

我執、我慢を根として、異義から異義におちて、自ら惑ひ、ひとをも惑はす身も、それを単に裁き排責し捨て去るといふのでもなく、またそれもやむないことである、仕方のないことであると許し甘やかすのでもなく、それをそれと徹見せられて、それ故の矜哀の悲涙にふれては、自らの間違ひの全体をそのままに投出して、懺謝し奉るばかりであります。

異義を分類し列挙いたしますと無数でありますが、異義者が自ら異義者であつたと照し出されて、大悲に立ち戻らされる根源は『異義者が可哀相である』との歎異の涙ひとつにかかつて居ります。異義の一切を知り通される智慧とそのことごとくを胸におさめて下さる慈悲が、久遠の父母のこころとなつて、倦むことなく飽くことなく哀愍し覆護して下さる。そこに異義者への救ひのひかりが射しそめるのであります。

然もこの悲心は、大声叱呼して広く世に問ふと云ふ風なものではなく、「外見あるべからず」と大徳自身の述べられる如く、放蕩に身を崩す子の帰りを待つ悲母の心に似て夜風に鳴る雨戸の音にも、ソート驚き起きて子をさがし求

めずには居られないひそやかな、それだけになほ切なる心であります。

わが身ひとつに

私は長年歎異抄を続んで参りましたが、初めの頃は、本抄の正しい玄意にふれたいといふ願ひにのみ動かされて、著者が歎き悲しんでゐる異義の問題は私には用事のないことである、祖師聖人の御物語だけでよいと云ふ風で、前半の九章と結びの章を大切に読んで、十一章から十八章まではついでに読むと云ふ状態で居りました。

そして直接池山先生の提撕を被り、近角先生の講話や愚註を読み、更に多種多様の講義を手に入る限り読んで居りますうちに、自分は玄意に徹し給うた先生方に導かれ、併せてあらゆる方々の信味も知らせて頂いて來たから、歎異抄は正しく深く広く読まして貰つてゐる、といふ法慢心に何時の間にかおちました。然し前にも述べましたやうに、慢心におちてゐる間はそれに氣づくことは出來ません、自分ではよい氣分にひたつてゐるのであります。

然しさう云う読み方におちて居ります私が、母の重病が続くといふ破目に出遭ひますと烏の鳴き声にもびくづき怖れるといふ迷信気が心の底に動いて居り、更にわが宗こそ尊しと他を見下す心もひしめき合つてゐる、また打ち向ふあらゆる人々に後世者振り信者ぶる心のやまぬ、何とも言へぬ醜い心も見え始めるにつけ、『法の魔性なり、佛の怨敵なり』との唯圓大徳の叱声が、そのまま私のことと、私の上におちて来たのであります。それと共に『泣く泣く筆をそめてこれをしるす』の悲涙は、それをそれと気づかないで、他人事として、異義者は実にけしからぬと傍観して居りました昔から、さう云ふ私故の涙であつたのか、私自身が涙を無限に流させ申してゐながら、それをそれと気づかなかつたのかと、文字通りに愕然といたしました。

それと共に、近角先生や池山先生方に対しても、先生方は徹底した方方である、自分は幸に恵まれてさうしたよい先生のお育てを蒙つてゐるから、他の人々よりは優れた聴聞をしてゐると云ふ風に、先生を慕ひ、先生をあがめてゐるまんま、何時の程にか、先生のお育てを受けたことを自分の誇りとしてゐる、師よ師よと申して居るまんま、師の徳を我身に飾り道具としてゐる、師につかへてゐるのでなく師を利用して我身を護つてゐる、さう云ふ無礼千萬な身も知れて参りまして斯る私を先生方はよく知り抜かれながらもようこそ御呆れ下さらなかつたことよと謝しまつるばかりであります。

思へば遠い昔から、一念の我執を募りとして、真実なるものを聞く力もなく、また読む力もない身であり、これからさきざきも、常に間違ひのやまぬ、無窮流転の身と知られるにつけましても、歎異の涙は、三世を貫いてひとへに私一人の上に注いでやみたまはぬ大悲の涙と頂くばかりであります。

祖師聖人は晩年、聖徳和讃を述作せられ、久遠の父母の恩を謝し奉つて居られます。

無始よりこのかたこの世まで、聖徳皇のあはれみに、多々の如くにそひたまひ、阿摩の如くにおはします。

多生曠劫この世まで、あはれみかぶれるこの身なり、

一心帰命たえずして奉讃ひまなくこのむべし。

久遠劫よりこの世まであはれみましますしるしには佛智不思議につけしめて善悪淨穢もなかりけり。

誦しまつるにつけても、哀々切々として生ける久遠のみ親につかへ奉られる聖人の心にふれるのでありますが、私自身は歎異抄をとほして唯圓大徳の久遠劫よりこの世まで、無限のあはれみをかぶる身を知らされ、歎異抄の一言一句は、ことごとくが間違ひづめの私を矜哀される大悲の文字であると感佩申して居ります。

四月　十五日

法藏の四十八願

福島政雄

聞名得忍の願

『設ひ我、佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞きて菩薩の無生法忍、諸の深総持を得ずば、正覚を取らじ』

阿彌陀佛の御名を聞きますと、菩薩の無生法忍と諸の深い総持を得させずばおかないといふ御誓で、聞名得忍の願と云はれて居ります。

さて菩薩の無生法忍とは、これは仲々難しいことであり

ます。講義本を開きますと無生の生をさとることゝ云はれてゐます。それはどういふことかと考へても解らぬことになります。

「忍」とは我身に体得するといふ心持でありませう。認めるとも、考へるとも云ふ人もありますが、たゞ認めるといふことでなく、身にしみて体得するといふことが忍であります。無生法忍といふのは、阿彌陀佛の御名を聞きますと、菩薩の無生法忍の境地が開けるといふことであります。無生の生とは只今の感じではこの世の中を眺めて見て自然界でも人間界でもすべて流転して、あてになるものは一つもないといふのが佛法の教へるところであります。斯様に無常流転して行くことを徹底して体得するやうになつて、我身も無常流転であると徹底して見とほして、これに如來のまことに触れてまゐります時、お念佛があるのであります。無生の生とは如来のおまこと。無生の生といふ如来のまことは、無常流転の人生をしみ〴〵と経験して行きますと無常がわかり、佛のまこともわかつて来るのであります。

「諸の深総持」と申されるのもお念佛のことであります。総持とは「ダラニー」であります。僅かの言葉の中に深い無量の意味をもつ、繰り返し〳〵唱へると深い無量の味が味へる。ダラニーは色々あります。又種々唱へられて居りますが、こゝでは総てのダラニーの根本になるダラニーそれが深総持であります。又ダラニーの一切の根底となるものであります。それはお念佛申すことになります。そのお念佛の中に如來の無生の生、佛は無常流転の生からそれを超越して無生の生に入られた方であります。その生命にふれますことが無生法忍を体得するゆえんであり、結局念佛ただ一つに帰するので、むつかしく云はれてゐますがそのやうになるのであります

女人成佛の願

最後に三十五の願女人成佛の願と申されて居ります願を申し述べます。

『設ひ我、佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界に、其れ女人有りて、我が名字を聞きて、歓喜信樂して、菩提心を発し、女身を厭悪せん。壽終の後、復女像と為らば、正覚を取らじ』

この願文の調子は第十八願によく似てゐる。成る程調子がかよふものを感じます。十八願のこゝろを特に女人、女性の上に改めて及ぼされた願であります。こゝには種々考へさせられる問題があります。

先づ女人、女がその女身をいとひにくむ、そして菩提心を起して生命終つて後に女でなくなる、さう云ふ願であります。変成男子の願とよく云はれます。法華経の提婆達多

品に八歳の竜女が見る〳〵うちに成佛するといふのがあります。あれをこの願に思ひ併せる、そして女が女でなくなり、男の姿となる、さういふところから変成男子と呼ばれるのであります。

この解釈について考へることであります。女が女であることを嫌ふならば男が男であることを何故嫌はぬであらうか、かう考へて見るのであります。すこし話が横道になりますが、徳川時代には「夕涼み、よくぞ男に生れける」と申しましたが、此頃の都会の人ごみの時から申しますと「ラッシュアハーよくぞ女に生れける」と云ひたくなります。このやうに時代が移り変りますと、女に生れてよかつたともなるのであります。

一体、女が女身をにくみいとふなら、男が男身をにくみいとふ、さうしますと女が男となり、男が女となることになりますが、それはよいことではありません。

さて男と女といふものはどういふことでせうか。このごろ西洋の研究者は、男は女になる要素もある。それが抑へつけられて男の要素が成長した、それは因縁次第で女になるつもりであつたが男になつたと云へるので、この反対もいへるのであります。即ち男になる筈のものが因縁次第で女になつたとも云へるのであります。これは西洋の生物学的に男女のことを申したのであります。

維摩経の中で舎利弗が天女に向つて貴女はどうして女身であるかと問ひますと天女が神通力をあらはして、舎利弗が女身になり天女が男となつて居ります。そこで天女が舎利弗に向つて「何故に女身になつたか」と問うて居ります。つまり男となり女となるのは要素はどちらもそなはつてゐるのでありますが、さうなるのは因縁の所生である。さうすると男がよいとも女がよいとも云へぬので、これは因縁であると云ふことになります。

さう致しますと女が女身をいとひにくむといふことは何かこだはつてゐることで、男もさう云へるのであります。そこで文字通りの解釈を離れて見方をかへることになります。

さて生命が終るとはどういふことでせうか。前に述べました第十一願の必至滅度のところで考へますと、生命が終るとは、所謂前念命終といふことになります。「善智識の言下に帰命の一念発得するとき娑婆の終り臨終と思ふべし。前念に命終し、後念に即生す」或は歎異抄の「命終すれば無生忍をさとる」といふ命終を「壽終の後」と見て考へて行きませう。するとその前までは女に生れていけないと思つてゐる人があるかも知れませんが、金剛の信心をたまはると、男と生れ、女と生れるのも因縁次第であると知

れて來る、さうすると自分の姿にこだはりがなくなる、そこで女は女のまゝにおさまる、こだはりがなくなることであります。女身とならぬとは、女身に対する執着、こだはりがなくなるのであります。肉身にこだはつてゐる、さうしたつまらぬ心がとかされて來ますと、男女といふこだはりの心がなくなるといふことが、壽終の後に女身とならぬ、さういふこだはりから解放せられて行くやうになることであります。

かやうになりませぬと観無量壽経の意味と矛盾するのであります。韋提希夫人が愚痴の女として打ち出し、母であり妻である、そのまんま無限の落ち着きが出来て來ることが大切なところであります。大乘の根本精神から申しますと、女は女、男は男、小供は小供の姿、そのまんまでこだはりが抜ければ、男女そのまゝで落ち着きが出て來る、そのこだはりが抜けた姿が大切なのであります。三十五願は女であるといふこだはりを取り去られて、女は女のなりで女身への執着を離れこだはりを取り去られた自然の心持ちで世に処するといふことをあらはされてゐるのであります。

これはその道の人、学者の方から間違ひであると云はれるかも知れませんが、三十五願が大乘佛教の大切な願として生きて來ると思ひます。さうすると女は男女の相対の立場を脱けて、女の立場をすてゝ歓喜心をおこすのであります。信心の上では女とか男とかにこだはらず、女は女、男は男のなりに信心がひらけるのであります。

○

大休聖人が四十八願の内で特別大切に御覧になりました願は以上の諸願であります。一々の願は一口に始めに読みました。唯大切なことは四十八願の一つ一つに十八願が裏付けられてゐる、一々の願は佛のまことから出て裏付けられてゐるのであります。四十八と云ふ数は別にこだはる必要は無いと思ひます。

聖人は先回に述べました三願と共に、今日述べましたのが大切な願と見て居られます。又四十八と云ふ数も異訳の大経には夫々異つた数になつて居りますから特別の意味はないと思ひます。総ての願ひは法蔵菩薩のまこと、阿彌陀佛のまことの生命からあらはれ出たもので、一々の願に佛のまこと、十八願のこゝろがあります。四十八願を私共は我身の上にうけて行くとこの様な味ひになります、法蔵菩薩のまことのあらはれとして私共の身の上にうけて行く事が大切であらうと思います。これで大体四十八願を終ります。不十分の点もありますが問題が殘りませう。あとは次回に致しませう。

彼岸中日　二七、九、二一日

病床遺稿（續）

臼杵祖山

彌陀成佛の讃を拜して

おほみおや今はわが身に成り給ふ法身自在やみを照して
無量光の讃を拜して
般若灯高くかかけて量りなしはかりある世の曉となる
無辺光の讃を拜して
解けはなれ辺りいまさぬ御光は有無平等に触れたまひけり

病中多くの同朋知識の深き御心尽しを仰ぎて

我身とぞ思ふ心のおほけなや多き恵みを仰ぐ身ながら
大空もおよばぬほどの大めぐみうけて生きける我身とぞ知る
仰ぎてもまた仰ぎても〳〵仰ぎたらざるおほきみめぐみ

○

今日（四月十六日）は祖師聖人の御命日であり、又氣分も餘程よし、十二日に認めた書幅や額面に印を押し、又書幅、額面等三葉を書けり。禅三昧為食。威神無極。為衆開法蔵。御恩々々。これで餘り疲労も覚えず、反て安心の感を起さしめらる、これもまた全く御恩なり。

南無阿彌陀佛

無碍光の讃を拜して

碍りなくすべてを照す御光りはさはりある身の上にこそ照る
無碍なりや無碍の大空有碍のままさへられもせず議ひもなし
みひかりのめぐみあまねく空おほて思ひはからふすべなかりけり

祖師聖人の御命日を仰ぎて

今日はしもひじりの御影あほぎつつ御名称ふ身のわれと尊し

念佛しながら

仰ぎつつ称ふる御名に先き立ちてくるひみだるる煩悩の鬼さなきだにものにもかほりうつりける心薫らぬ我が身をぞ恥ず

この両三日來は病氣も小康を得て腹痛もなく気分もよし。是れ全く主治医先生の誠意なり、又如幸（御令妹）を始とし多くの同朋知識の念持力の御恩とこそ感謝するばかりであります。

それに今日は祖師聖人御命日を御縁として臥しながら一時間は御念佛相続したに就いて我身の淺間しさが味はれる仰ぎつつ称うる御名に先き立ちてくるひみだるる煩悩の鬼

この淺間しき我心をかへりみて更に恒順衆生の大悲を仰ぎて

煩悩の後にはなれず順ひてみまもりたまふ御親尊し

我といふなきわれにわれ囚はれてわれとわが身を苦しませける

四月十七日朝

○

都城市、江夏芳太郎氏姪、高橋玉子氏來り法味を問はれるに答へて俱に御法を味へる。此間に如幸も俱に又富松夫人もともどもなり、ありがたき御縁なりし

『彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりとの祖師聖人の御法味の尊とさ、仰ぎても〳〵餘りあり。

助けて頂きたい、助かりたい、如何に聞けば分るであらうか、信ぜられるであらうか、安心できようか、といふやうな作善思想に要のない、真にたすけられまいらせてゐる安心であります。

安心せねばならぬといふ、用事を持つ安心でなくして、用事を持たぬ、自然法爾の安心であります。所謂無用の用、理外の理、無義の義と申しますか、決定の意をよく〳〵味ふべきであります。

それは私の信心安心の体は、名号六字は成就したまへるものを、それを私勝手に増益損減して、得不得、安不安、信不信、聞不聞を案じ煩ふは、餘りにも勿体ないことであります。

顧ふに五劫兆載の願行も、釈尊出世の本懐も、その他高僧方の出現も、殊に祖師親鸞聖人は、この悟りたいといふ私達の疊重の荷物を取り去りて、安心信心に要なき自然のままを、即ちたすけられまいらせて居ることを、御知らせ下されようとの御慈悲の外に何一つの御思召はましまさない、仰ぐべし〳〵。かく申すことも骨張してかくあるべきことなど強ふべきにあらず。

例へば思出しても親、打忘れても親、忘れても親に変りはない、それは子一心の親であるからであります。又思出しても子、打忘れても子、時と処との縁の現れによつて子に変りはない、矢張と親同体の子でありますことを味ふことも亦大事であります。

苦しむ者信を得べくんば、三悪道こそ然るべしと思はる。樂なるもの悟り難しと言はば、佛国土にての成佛はなかるべし。

これ等の沙汰は別として、お念佛中心一体の味は、苦は苦ながらに増減なく南無阿彌陀佛と攝取にあづかり、樂は樂ながらに南無阿彌陀佛と不捨をたまはり、又他の一切の時処諸縁に対して御念佛に救はれまいらせてゐる仕合せであります。

これやがて一切の無量の心境の一一を南無阿彌陀佛と拜む尊とさである、この拜む尊とさは、拜まれてゐること、即ち常に南無阿彌陀佛に拜まれてゐる、その影現であることを尊まれます。念佛して彌陀にたすけられてとは、彌陀に念ぜられたすけらるるの祖意を仰ぐべきであります』

○

十八日の夜十時頃より腹痛劇しく、又嘔吐を催し吐出すこと三回に及ぶ。この間に妹の心痛を思ふに容易ならぬを見受く。手足の痛みその不自由を忍び介拘して下さる様の気の毒に感じ、ただ〳〵感謝の外なし

十九日午前三時頃松本さんとヒデ子を煩はして小学校より電話を頂いてわざ〳〵中野先生に來て頂き服薬にて更に腹中の停滞物を吐き出す。三回に及べり。アア苦いこと言い得ない程でありた。それでも先生がついて居て下さる心強さがあり、それに就て如來の御慈悲を仰ぎて両々俱に尊まれた。後にて前にかはりて樂になつた。思へば苦も樂も俱に御恵みの中であつた。

一息の中にきはまりなきめぐみ仰ぎて生くる我身尊し

はかりなきめぐみに生くる我が身なり慈悲のほかにわれあらめやは

慈悲てふめぐみの中にめぐまれてめぐみを分かぬ我が身はずかし

慈悲しらぬままにめぐみにめぐまれてめぐみの外に生ける我なし

知る知らぬ我が心根の及びなき尊きめぐみ深きみめぐみ

南無阿彌陀佛、ただ一佛の御名ならず三世法界おさめたまひて

おさむるもおさめらるるもうちとけて阿彌陀一体不二の尊とさ

御慈悲にめぐまれながらみめぐみを知らざるままにみめぐみに生く

あはれなり知るべきことを知り得ずに思ふまじきに狂ふ心の

目覚めなき悟りも分かぬ盲人のただ御慈悲にみちびかれつつ

遺言

葬儀は極めて簡単を要す。

自分の希望は日曜に御参りになる自照会の御同朋がお念佛して送りて下さることを第一の喜びとするのである。

そして餘所への死亡通知は初七日後にゆるゆる発送すること。殊に時局柄多くの御方に來往の煩らはしさをおかけ申さないこと。

道味す人生臨命終
仰胆す佛壽おのづから圓融し玉ふ
欲に堪えたり、覚も無く、はた悟も無し
何をか識り何をか知らん心境空なり
一念声中願行を具す
因まどかに果みちて甚だ分明
永劫と端的とを超過して
日々平生自業成ず
南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛に信ぜられ念ぜられまいらせ居ることを仰ぐとき、おのづから南無阿彌陀佛が信じ念ぜしめられたてまつる、自然法爾の尊きことはりなり。

これやがて佛の正覚と我等が往生を南無阿彌陀佛と成就したまへる無上宝珠の同体の醍醐味なり。

されば我等に於て思慮分別の要もなく疑法退転の恐もなし

かへりみれば、聞き得たり、信じ得たり、願生せり、往生を得、不退転に住し得たりなど申すは、是れ増益のはからひなり、聞き得ず信じ得ず、願生し得ず、不退転に住し得ずなど申すは、是捐減のはからひなり。

この増益、捐減の二辺のはからひにかかはらず、ただ如來の三信具足の至心に廻向したまへる外に我等に於て、聞不聞、信不信、等沙汰すべきにあらざるなり。

是れ即ち至心に廻向したまへる内徳に圓満成就、真実にましますが故なり。圓満なれば増益捐減の要なし、成就なれば不足言をさしはさむべきにあらず、真実なれば遲凝躊躇もなかるべし。

聖人の仰せに、信ずるといふも心なり、疑ふといふも心なり、我が心にては往生せず、信ぜさせ給ふは佛智なり（御臨末御消息）、又彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなり、又念佛して彌陀にたすけられまいらせて、この尊き御法味を深く〳〵御仰ぎたまふべきなり。

昭和二十三年四月廿二日未明に自ら道味せるままを書き記して

祖山

如幸御許に

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

懐へば昭和二年以來廿二年間、今日まで自分を保護してくれた、自分が怠弱に陥つたときには緊張精励に導てくれた、又精進すべきときには、常に助力を加へて、より以上に精進を増上せしめてくれた。風雨寒暑のそのときどきに、起居動作のそのおり〳〵に、よく自分を介抱してくれた。是全くただに人間兄妹の親しみだけにあらず、これ偏へに佛祖の御冥慮に依るものならずんばこれあるべきにあらずと感謝に堪へず。

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

牝豺と鶴

ヂヤータカ物語

昔々印度のハラナの国で梵与王といふ王様が国を治めて居られた時のことであります。遠い前の生から道を修め徳を積んで來られた菩薩はこの時、盗賊をなりはひとする者を救ふ為に五百の手下を率ゐる山賊の頭目となつておいでになりました。

さてこの国に一人の富豪が居りましたがある時田舎の知り人に大金を貸したまゝまだ返してもらはない内に死んでしまひました。そしてその妻も亦病の床に臥し臨終も迫りましたので、息子を枕辺に呼んで苦しい息の下から「せがれや、お前のお父さんは非常な大金を人に貸して返してもらはない内になくなられました。若し今私が死んでしまつたならば、もうあの人はお前に返してはくれないだらう。お前は私の息のある間に行つて早く返してもらつておいで」と云ひました。息子は早速母の言葉に從つて田舎へ行きその大金を受け取つて帰途につきました。ところが彼の母はいとし子の顔を見ない内に心を殘して死んで行きました。そして我が子可愛さの一念から牝豺に生れかはつて息子の帰り路に待ち受けて居りました。

その時かの盗賊達は旅人の持物を掠奪しつゝこの路に住んで居りました。かの牝豺は我が子が森の入口まで辿りついた時、どうかしていとし子をこの危難からまぬがれさせなければならないと心はあせりにあせりますが、悲しいことに豺と生れた彼女には人間の言葉が話せません。「森に入るな、森に入るな、森には恐ろしい賊がゐる。お前を殺して金を奪はうとしてゐるよ」と再三路を遮つてとめました。が息子はそれを自分のなつかしい母と知る事が出來ないで、この不吉な豺奴がわたしの行くのを邪魔ばかりすると思ひ、土塊を投げつけ、杖を振り廻して牝豺を追ひ払つて森の中へわけ入つて行きました。その時一羽　鶴が彼の頭上を飛びながら「この男は莫大な金を持つてゐるよ。彼を殺して大金をとつてやれ」と声高く叫んで盗賊の方へ行きました。青年はこの鶴のいまはしい鳴声の意味も知る事が出來ないで「おゝ目出度い鳥が飛んで行く、私を祝つて歌つて行くのにちがひない。私の運命は今に栄える事だろう」と空しいよろこびに鶴の飛び去つて行く空を合掌して「鳴けよ、鶴よ、鳴け」と叫びました。

一切の声の意味を聞きわける事の出來る盗賊の頭目なる菩薩は、この牝豺と鶴の行為を見て考えました。「あの牝豺は彼の母に相違ない。だからこそ彼女は我子が殺されて金を奪はれることを恐れて息子が森に入るのをとめたのだ。又鶴は前生で青年の敵であつたに違ひない。それ故彼は『この男を殺して大金を奪へ』とわれ〳〵に告げたのだ。それにこの青年はそれらの意味を知らないで、自分の身を案じ幸福を願うてくれる母を不吉なものと追ひ払ひ、不吉を願ふ鶴を我を祝福する者として合掌した。あゝ実に愚かな者よ」と――

やがて青年は森深く踏み込んで行つて、遂に待ちかまへてゐた盗賊に捕へられてしまひました。引き立てられて來た青年に菩薩は

「お前は何処の者だ」

とたづねました。

「ハラナの者です」

「何処へ行つたのか」

「私の父の貸したお金を返してもらひにしか〴〵の処へ行きました」

「そして金は返してもらつたのか」

「さうです。受け取つて來ました」

「お前は誰の使ひで行つたのか」

「私の父は死に、母も大病にかゝり、その死の床で母は心配して私に早く返してもらつて來るやうにと云つたのです」

「お前の母は今どうしてゐるか知つて居るか」

「頭目よ、私は家を出てからの事は知りませぬ」

「お前の母はお前が出発して間もなく死んでしまつたのだ。そして我が子の身を案じて牝豺に生れかはつて、お前を災難から守つてやらうと路を遮つてとめたのだが、お前はそれを邪魔にして追ひ払つてしまつた。又鶴はお前の怨敵なのだ。彼は『この男を殺して金を奪へ！』と私に注進して來た。併しお前にはわからなかつただらう。お前は愚かにもお前の幸福を願つてつきまとふ母なる豺を『わが不幸を願へる者』として退け、不幸を願ふ鶴を『わが幸を願へる者』と思つて合掌してゐた。愚かな者は友の忠告を聞けばこれを曲解し、へつらひを云ふ者を良き友と思ふ。善も悪も、真実も不実も見わけふ事が出來ないのだ。さあ、心して金を持つて疾く帰つて行け！」

と云つて菩薩は青年を無事に帰らせておやりになりました。

詠草

近角先生

東京都　柳瀬劫子

先生の形見の筆に墨ふくめ書く百ケ日のおつつみの上

先生が肌に着ませし羽二重の小袖冷たし朝の時雨

悩みもちて敷石踏みて訪づれば應と溫くも迎ひませしか

▽推薦図書△

絶對他力と体驗　池山榮吉著

定価二百二十円、送料三十二円。

発行所、京都市下京区油小路通六條南入。丁子屋。振替、京都一四五〇番。

近角先生と共に独乙に留学せられた池山先生が、日本最初の労働問題を通じての社会事業を提唱せられ、その実践に移られるに及び、名利の一念の強さしぶとさに気づかれたのを縁として、四十二歳の時、歎異抄を通じて念佛に帰入せられたのであります。それからほどなく奥様が胃癌となられ、奥様も亦幸に念佛の人となられたのであります。

「聖人が至德風静、衆過波転と申されているが、自分は妻の病を縁として、今生夢のうちのちぎりがそのまゝ来生さとりのまえの縁と結ばれたので、そこを身に深く味ひ始めた」と生前も申されていました。かうした頃に内なる慶びは自然に外にあふれて、「絶対他力と体験」といふ書として発表せられたものであります。本年は先生の十七回忌にあたりますので、京都の法友榊原德草師と共に、丁子屋の藤井さんに再版を依頼しましたところ快諾を得、且つは「佛と人」の著書も近く再版下さる予定になりましたことは誠に有難いことであります。いづれ「佛と人」も出來次第に御照会申し上げますが、この書は先生の晩年の講話や随筆を集められたものであります。

編集後記

花時もすぎて、新緑の山野が白い光線に照し出され、緋鯉眞鯉の五月の風にはためき、幼い生命の祝福されてゐる姿は何時までも残る日本の美しい象徴でありませうか。

それにひきかへ、水爆や原爆の実験が種々と取り沙汰されて世界を震動させて居ります。日本は不幸にも広島と長崎に原爆をうけ、ビキニ島の水爆実験の被害者をも出して居ります。戦場で細菌戦や毒瓦斯の使用をさへ表面だけでも禁止してゐる今日、人類全体がどうなるかも知れぬといふ水爆が、全人類の実意ある決議のもとに善処せられることを願つてやみません。

○

△福島先生の四十八願の御講話は大体本回で終り、次回は法蔵菩薩の勝行段の御講話をいただきます。それで今回は聞名得忍の願と女人成佛の願を私共の生活に即して信嘗して下さいました。特に女人成佛の道味は刮目の外はありません。さて先生は四月初めから東京都世田谷区世田谷町四丁目七二四番地に御移りになりました。又『七いろの妻』といふ先生の著書が、京都市下京区堀川通花屋町、百華苑から発行されました。東洋の女性美と、西洋の女性美とを描かれつつ、玉耶経から七種の妻の姿を述べて女性の眞の姿を讃えて居られます。定価五拾圓、送料八圓。

△病床遺稿の臼杵老師の絶筆、病む私にとつてはひとごとではありませぬ。

仰ぎつつ称ふる御名に先き立ちてくるひみだるる煩悩の鬼。

煩悩の後にはなれず順ひて、みまもりたまふ御親尊し。

碍りなくすべてを照す御光は、さはりある身の上にこそ照る。

終生の燈炬として有難く頂いて居ります。

△歎異のこころ、は唯四大徳の悲心が私の上に感ぜられ、大徳をとほして如來聖人の大悲を頂いて居ります有りのままを表白いたしました。この悲心に生の限りを攝受せられて辿らせて頂くことであります。

△牝豺と鶴のヂャタカ物語は、菩薩が稀らしくも盗賊の王の姿をもつて現れ給うて、救ひの御手を延べて居られます。眞実の姿を徹見する力のない愚かさには、敵を味方と思ひ、味方を敵と思つて、迷ひつづけることであります。斯様な私共のこの底の底まで見とほされる菩薩の悲心は如何ばかりでありませうか。

聚墨生

昭和二十九年五月十日印刷
昭和二十九年五月十五日発行
毎月一回十五日発行
一部　十七円（郵税共）
定価　半年　百円（郵税共）
一年分　二百円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千種印刷所

名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　一道会館　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番

慈光　第六巻第五号　昭和二十九年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十二日　第三種郵便物認可